

ルカによる福音書9章18-26節 「あなた方は誰と言う？」

1A 人々の評価の間の告白 18-20

1B 預言者たち 18-19

2B 神のキリスト 20

2A 人々の生活の中での生き方 21-26

1B キリストの受難 21-22

2B 十字架を背負う生活 23-26

本文

ルカによる福音書9章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ルカ 8 章まで来ています。午後にルカ 9 章の 1 節から 50 節までを一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、9 章 18-26 節に注目します。イエス様の働き、宣教の働きにおいて、最も大きな分岐点になっているところです。「18 さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」19 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」20 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「神のキリストです。」21 するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。」

ここでのイエス様の言葉で大事なものは、「**あなたがたは**」であります。群衆が、いろいろなことを言っていますが、「では、あなたがたは、わたしのことをだれだと言いますか。」と言われていたところに、私たちが他の人々の言っていることに抗ってでも、自分が何を信じているのかを明らかにする必要があることを教えています。

1A 人々の評価の間の告白 18-20

今、読んだ箇所は、18 節から 20 節までが、そうした「自分の告白」がいかに重要かをイエス様が教えている箇所です。そして 21 節から 26 節までが、「自分の生き方が」が人々と異なっているも構わない、「自分はこう生きる」という自分の生き方を知っていることがいかに重要かを、イエス

様は教えておられます。まず、自分の告白についてです。

1B 預言者たち 18-19

18 さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」19 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」

イエス様が、弟子たちに聞いておられます。これまで群衆がたくさん、イエス様に付いてきていました。この話の前には、五千人の成年男子がいるところで、パンと魚の食べ物を与えたところでした。その中で群衆が、イエス様についてどう思っているか、いろいろな意見がありました。

イエス様が優れているのは、弟子たちにご自身が誰であるかを主張されるのではなく、彼らがどう思っているのか、引き出しておられることです。これまで、イエス様はさまざまな教えによって、また多くの行いによって、ご自身が誰なのかを示して行かれました。ご自身が言われていることについて、律法学者などが疑いを持って、それに対してイエス様は強く主張をするのではなく、行いによって示されました。「罪が赦されました。」と中風の者に言われて、それで「罪を赦すなど、神にしかできないのに、冒涇だ」と思っていたところ、イエス様は、「罪が赦されたと言うのと、この人を起き上がらせるのは、どちらが易しいか。」と言われて、敢えてこの人を起き上がらせるほうを選ばれたのです。このことによって、罪を赦す権威を持っていることを示されたのです。イエス様は反発するユダヤ人にこうも言われました。「ヨハ 10:38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に在ることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」わざによって信じなさい、と言われます。それで、イエス様は弟子たちのそばにいて、ご自分のわざを行われ、最後は彼らに権威を与えて、ご自分のわざを行うようにされました。それによって、彼らのご自身のことをどう言うのか、その告白を待っておられたのです。

日本語の諺に「論より証拠」というものがありますね。イエス様も数々の印を見せて、それでご自身が誰なのかを知るようにされました。私たちは、行いによる証しが必要です。特にキリスト教には必ずしも友好的ではない、敵対的ですからある人々には、言葉以上に行いによる証しが必要となります。ペテロ第一の手紙には、迫害の中にいる兄弟姉妹にペテロが励ましを与えています。「I ペテ 2:12 異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。」人間の立てた制度にも、従いなさいとペテロは勧めます。その時はローマ社会です。不正もたくさん当たり前のようにあります。しかし、それでも従いなさいと勧めます。私も、時々、質問や相談を受けます。例えば、年金制度が破綻しているのに、年金の支払いをすべきなのか？とい

うことですが、はい、すべきです。それは、立派な行いによって、人々が神をあがめるようにするためです。そして、不信者で、神の言葉に従わない夫であっても、「3:1 妻の無言のふるまいによって神のものとされるからです。」とペテロは言っています。それから、主人に対して奴隷は従いなさいと命じられています。「2:18-19 しもべたちよ、敬意を込めて主人に従いなさい。善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。」このようにして、人々は神をあがめるようになります。

私たちは教会に未信者の人を連れてきますが、その時に何がもっとも効果的な伝道になるでしょうか？「ヨハ 13:34-35 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」私たちが、誰かほかの兄弟姉妹に敵意を持って教会を過ごしているならば、それこそが伝道の最も大きな妨げになります。

ですから、イエス様が行いによって示され、それから彼らのご自身を信じるようにされました。ところがです、群衆はそのような結論には至っていません。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」と言っています。バプテスマのヨハネは、ヘロデによって殺されたのですが、けれども生き返ったのだと彼らは話していました。そしてエリヤの名を挙げています。主が来られる前にエリヤが来るとマラキは預言していました。そして昔の預言者の一人というのは、モーセが死ぬ前に、こういったからです。「申命 18:15 あなたの神、【主】はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。」と言ったからです。いずれにしても、終わりの日に偉大な業を行う預言者というようには考えていました。パウロが、コリントの人たちに、「I コリ 1:22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。」と言いましたが、しるしを求めているのです。

群衆はイエス様に多大なる尊敬を寄せていましたが、その大いなる業に感嘆していたものの、この方については信じていませんでした。こう言った人々は多いですね、キリスト教については尊敬はしているけれども、それは何か良い行いをしてくれたからだ、ということになります。大きな働きをしてくれたら、とても尊敬しているけれども、自分自身がイエスを信じるのか？となりますとそれとこれとは別であると言う態度です。

2B 神のキリスト 20

そうした中で、イエス様が問われたのです。「イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「神のキリストです。」」イエス様が、神の約束されていた

メシア、油注がれた方だという告白です。キリストとは、ヘブル語のメシアをギリシア語にしたものです。メシアとは、「油注がれた者」という意味で、神がご自分が治める国を、ご自分の選ばれる王にお任せになります。そして、その王に油を注ぎ、任命します。ダビデが、預言者サムエルによって油を注がれて、後にイスラエルの王となりました。そのダビデの世継ぎの子が、神の永遠の国を治める王となるという約束を、ダビデが受けました。そして、イザヤ書などによって、そのメシアはユダヤ人だけの王ではなく、地の果てに至るまでこの方をあがめるために、人々がエルサレムに来るといふ預言もあり、王の王、主の主となられるということです。

そしてこの王が、虐げられている人々、苦しんでいる人々のために、その敵どもを粉々に打ち砕かれ、神の国を地上に打ち立ててくださると彼らは信じていました。交読した詩篇第二篇は、そういったことが背景であります。

このことを次にイエス様はこのことをだれにも話さないようにと戒められますが、それだけ大きなことを大胆に、ペテロは告白しました。しかし、この方が死者の中から三日目に甦られてから、ペテロは自分が牢屋に入ろうが、臆することなく大胆にキリストこそが人々を救う方として宣言します。ユダヤ人議会、サンヘドリンにて、彼は尋問を受けます。「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」イエスは、救いの道の一つではないのです。イエス様こそが、救いの道であり、この方によらなければ、天下に救われるべき名として人間に与えられていないのです。

イエス様こそが、救いの道であるということ、この排他性によって、人々は嫌だなどと思いますし、またキリスト者も自分がクリスチャンであることを証しするのをためらってしまうのです。多くの人は、イエスは数あるすばらしい教師の一人であると思いたいのです。そして、神は一人だが、救いへの道はいろいろあると思いたいのです。他にも宗教があります。ユダヤ教、イスラム教があります。実に、今、イスラエルに行けば、エルサレムという同じ場所で、三つの宗教が所狭しと、そこが自分たちの場所であると主張しています。そして東洋には仏教もあります。それぞれが救いの道で、同じ神に至るのではないのです！そうではなく、イエスこそが人を罪から救う名として与えられ、この方以外には救いはないと、宣言しています。

しかし、ペテロは大胆に、「あなたは神のキリスト」と告白しました。私たちは、イエスが主であられ、救い主であられることを告白するように、私たちは自分で、他の人たちがイエスをどう見ようが、私はイエスを主として、救い主として信じて告白しているのでしょうか？

2A 人々の生活の中での生き方 21-26

そしてこの告白に基づいて、イエス様が弟子たちに強い戒めを与られます。

1B キリストの受難 21-22

21 するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。

イエス様は、ペテロがご自身を神のキリストであると告白したので、そのキリストの使命をこの時から明確に語られるようになりました。それは苦しみを受ける姿であり、しかも神の家を管理しているはずの宗教指導者たちに捨てられるということでもあります。メシアが、王の王として来られ、人々を苦しみから救われるということ、こうした栄光に輝き、力にあふれる王の姿が預言されています。しかし、不思議にも、しもべとしての姿も預言されています。僕として人々に仕えられて、最後には、なんと人々の罪や咎のために、代わりにこの方がその苦しみを受けられる様子が、イザヤ書 53章で預言されているのです。しかも、神の家を建てる者たち、この人たちこそが受け入れなければいけないのに、この人たちからかえって捨てられるという不思議を預言しています。「詩篇 118:22-23 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」

これが、メシアであられました。この方は預言者であられます。大いなる業を、神にしかできない業を行われました。そしてこの方は王であられます。再び来られて神の国を建て、王として君臨されます。けれども、この方はまた、祭司でもあられます。人々の弱さを身にまとい、人々の間で仕え、そして最後は、神のしもべとして苦しみを担われるのです(ヘブル 5:7-10 参照)。弟子たちにとって、祭司としてのメシア、僕としてのメシアを完全に見失っていました。

しかし、三日目によみがえるとも主は、言われています。この時にこの方が神の御子であることが公にされ、天に上げられ、神の右の座に着かれます。つまり、仕える姿を身にまとい、最後まで従うからこそ、神が引き上げてくださり、栄光の姿へ取り戻してくださるということです。「仕えることによって、支配する」という道です。あるいは、へりくだることによって神が高めてくださる道です。ピリピ書 2:6-11 を読みます、「6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。10 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」

2B 十字架を背負う生活 23-26

そこで主は、私たち弟子たちにも、「仕えることによって、神が引き上げてくださる」という同じ道を教えられます。「23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を

捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

十字架とは、ローマが反逆する者に対して、力をもって服従を強いる道具であります。自分たちに力はなく、ローマが主権を持っているのだという象徴でした。人を卑しめ、見せしめにて、殺すことによって、ローマに逆らうとこのようになるのだということを表すものでした。イエス様に従うのであれば、このローマの頸木を打ち砕くと考えてはならない、むしろこの木を背負うようにして従わないといけないうのだ、ということです。

ここで大事なのは、「自分を捨て」るということです。自分というものは、神の御心に従うということ、十字架を背負うということを絶対に嫌がります。けれども、そこで自分を否むという強い決心が必要であります。そこで次です。

24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。

自分というものは、自分を救おうとします。必ず、自己生存の欲求があります。けれども、自分を生かせば生かすほど、実はその命は失われていくのです。キリスト者は、ここにあるようにイエスのために、自分の命を失う者です。自分のいのちをキリストのゆえに失うと、そこにはキリストが生きて働いてくださいます。キリストの命が満ちることによって、自分は救われているのです。「ガラ 2:19-20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」

25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

私たちは、自分を失う生活は、恥だと思ってしまう。どうしても、自分を低くし、しもべの姿を取ることは、恥だと感じてしまいます。福音を語ることも、それによって人々におかしいと思われる、反対を受けると思って、それをやらない、隠そうとしてしまいます。けれども、そのことによって自分を救おうとしており、自分を救おうとするならば、それを失ってしまうのです。そして、後に、父なる神の前に出る時に、人の子がその人を恥じると言われているのです。キリストと共に、苦しみがあるけれども、それでも自分を捨てます。自分を失います、しかし神はそうした忠実に生きる者たちを引き上げ、キリストの栄光を身にまとうせてくださるのです。